

自由論題 2「東南アジアの経済」・報告 4

報告テーマ

地域研究の方法論—批判的实在論の観点から—
“Methodology of Area Studies: From the Viewpoint of Critical Realism”

氏名(所属)

高橋 正樹(武蔵野大学)

要旨(800字程度)

地域研究は単一事象研究であるため法則性の説明には不適切であり、多数事例による定量分析をすべきであるという議論が比較政治学を中心に出されてきた。本報告の目的は、この議論を批判的に考察し、地域研究の意義と研究手法を批判的实在論の観点から検討することである。

地域研究は、その研究手法として個性重視、総合的研究、学際的手法、詳細な記述等が謳われてきた。しかし、その研究手法は理論軽視の解釈学的手法か、既存のディシプリンへの傾斜か、研究手法への無関心に向かった。

既存ディシプリンへの傾斜のひとつが、定量分析の手法を地域研究に求めるきっかけになった。政治学の領域では、キング、コヘイン、ヴァーバ(KKV)が記述的な定性研究に、少数事例の比較研究や多数事例の定量研究の手法を求めた。

この研究手法の違いの理由を理解するためには、存在論と認識論の相違を理解する必要がある。KKVに代表される定量研究は、存在論として、社会には自然と同じように一般的法則があると考えられる。また認識論として、自然に対する物理学と同じように、社会科学に社会における一般的な法則を発見し、説明し、将来を予測することを求める。それによれば、地域研究は地域横断的な一般化が困難であるから、科学としての評価は低くなる。

これに対し、批判的实在論では、存在論として、社会には一般法則が支配するような実在はなく、社会の実在は、出来事や事象を発生させる固有の複雑な因果メカニズム(文脈)であると考えられる。そして、その認識論として、多数事例の定量研究ではなく詳細な記述による固有の因果メカニズムの解明を目的とするとともに、解明の手段として理論仮説を重視する。解釈学とは異なり、事実それ自身は何も語らないと考える。また、個別の社会の詳細な分析を通じて、その社会の本質である因果メカニズムの理論化が不可欠であると考えられる。この批判的实在論の方法論は地域研究と親和性を持ち、さらに地域研究の理論的貢献や「比較地域研究」の可能性をも示唆してくれるであろう。